

# 天井桟敷の人々

2007(平成19)年4月11日鑑賞<OS名画座>

★★★★



監督＝マルセル・カルネ／脚本＝ジャック・プレヴェール／出演＝アルレッティ／ジャン＝ルイ・バロー／ピエール・ブラスール／マルセル・エラン／ルイ・サルー／マリア・カザレス／ピエール・ルノワール（ザジフィルムズ配給／1945年フランス映画／195分）

……ナチスドイツ占領下でつくられて1945年に公開され、フランス国民に最も愛されている名作が、OS名画座で半世紀ぶりに上映！ 舞台は、19世紀のパリ「犯罪大通り」……。笑顔のすばらしい女芸人ガランスと彼女をめぐる4人の個性豊かな男たちが織りなす人間ドラマは、おしゃれなセリフ満載の劇的な展開と相まってこのうえなくステキ！ あの暗黒の時代によくもまあこんな映画が、と考えながら、いかにも文明国フランスのテイストがよく効いた名作をじっくりと味わいたいものだ。

## モノクロ、スタンダード・サイズとは……？

今ドキの映画はほとんどカラーだが、1945年公開のこの映画はモノクロ。そして、スクリーンサイズはスタンダード・サイズ。

ここで私の映画検定3級の知識を少し披露すれば、スタンダード・サイズとは縦横の長さの比率が、縦1に対して横1.33の割合のもの。このスタンダード・サイズからその後次第に縦横の比率が大きくなっていったわけだ。そして、ワイド・サイズは一般的に、ヨーロッパン・ピスタが1：1.66、日本映画でピスタ・サイズと呼ばれるアメリカン・ピスタが1：1.88。そして、スコープ・サイズは1：2.35。もっともこれは、私の教科書である『映画検定 公式テキストブック』（181～182頁参照）を丸暗記して得た知識……。

横長のスクリーンに馴れている目には、1：1.33というスタンダード・サイズは、一見古くさい感じがするが、上映が開始されれば馴れてくるもの。音響の悪

さや画面の多少の乱れもほとんど気になることなく、スクリーンに集中させられることまちがいなし。もちろん映画づくりには技術が大切で、現在ではドルビー・システムやCG、VFXなど最新の技術をフル稼働させて数多くの映画が作られているが、技術以上に大切なことはその内容……。そんなことを考えながら、62年前の名作をじっくりと……。

## 株式投資と映画鑑賞

株式投資には人それぞれさまざまな動機があるが、数年前から私が凝っている(?)のは、株主優待としてお食事券のつく吉野家やマクドナルドなどの株、株主優待として劇場招待券のつく松竹・東宝・東映そして東京テアトル・オーエスなどの株。現在、オーエス株式会社は1000株70万円くらいだが、それで半年間で14本の映画を観ることができる。したがって、1回1000円と計算しても年間2万8000円。これを金利と見れば年間約4%の利回りとなるから、銀行に定期預金しておくよりよほどマシ。ちなみに、東京テアトルは1000株30万円くらいで、半年間で6本だから、計算すれば……？

そんなオーエスの株式を購入したことと自宅から自転車で10分という都心居住の利便性のおかげで、最近はOS劇場・名画座へ通うことが多くなった。そんなOS名画座の4月のラインナップは「クラシック映画特集 Vol.2 大作映画特集」で、何と『ベン・ハー』(59年)、『天井桟敷の人々』(45年)、『サウンド・オブ・ミュージック』(64年)、『戦場にかける橋』(57年)の4本が上映されている。日々の試写室通いの合間(?)での映画館通いだから、時間的にそのすべてを観るわけにはいかないが、この『天井桟敷の人々』と『戦場にかける橋』だけは絶対きちんと観なければと思っていたもの。そんなチャンスを与えてくれたオーエス株式会社に感謝……。

ちなみに、来る4月26日にはオーエス株式会社の株主総会がOS劇場で開催されるが、ネット情報によると、去年は総会終了後、株主特別試写会として『胡同のひまわり』(05年)が上映されたうえ、通常上映されている2本の映画も観ることができ、さらにお土産として5月分の映画券2枚がもらえたとのこと。代理出席もオーケーだから、必ず出席しなければ……。

## 1945年の公開ということは……？

このフランス映画が公開されたのは1945年だが、これは日本敗戦の年であり、ナチスドイツが降伏した年。しかも、この映画の製作には3年3カ月を費やしたということだから、この映画は何とナチスドイツの占領下のフランスにおいて製作されたというわけだ。ナチスドイツが猛威をふるった1940年代初頭、フランス映画界の巨匠たちは次々とハリウッドに逃れたが、マルセル・カルネ監督があえてフランスに留まり、19世紀のパリの裏町を舞台としたこんなおしゃれな映画をつくりあげたのは、さすが文明国フランスと感心せざるをえない。

ちなみに、日本が中国大陸へ進出した1930年代後半、中国でもさかんに映画がつくられたが、そのほとんどは戦意を鼓舞するための反日・抗日映画……？ ところがこの『天井桟敷の人々』は、反戦映画でもなければ、反ナチ映画でもない。それにもかかわらず、ナチスドイツによる占領という暗く陰鬱な時代に滅入ってしまうことなく、恋や人生を明るく語り、女芸人ガランス（アルレッティ）の「恋なんて簡単よ」というセリフをキーワードとして、人生を笑いながら生きていく人間模様を描いたマルセル・カルネ監督のしたたかさとそのメッセージを、しっかりと受け止めたものだ……。

## 初の映画は？ 初の映画館は……？

3月21日に観た名作『ニュー・シネマ・パラダイス』（89年）はイタリアのシチリア島の小さな村にあるパラダイス座が舞台だったが、これは映画館。

ここで再び映画検定3級の知識を披露すれば、世界初の映画は、フランスのリュミエール一家が1895年2月に完成させたシネマトグラフであり、また世界初の映画専門館はトーマス・L・タリーが1902年4月に、ロサンゼルスサウス・メイン街にオープンさせたエレクトリック・シアターだとされている（『映画検定公式テキストブック』62～63頁参照）。その後、全米では「ニッケルオデオン」と呼ばれる映画館が爆発的に広がっていったが、これは、5セントのニッケル銅貨にギリシャ語の劇場を意味するオデオンをつけた造語。つまり、入場料5セントの映画館を指す言葉だ。したがってこの頃から、上流階級は演劇を、そして高

い演劇の入場料を払えない庶民や英語がわからない移民はニッケルオデオンに娯楽を求めたというわけだ（『映画検定 公式テキストブック』64頁参照）。

## 劇場？ 芝居小屋？ なぜ犯罪大通り……？

16～19世紀のヨーロッパで花開いた音楽や演劇芸術は、もともと王族・貴族のものだったからこそ壮大で美しい劇場がたくさんつくられることになった。他方、時代が進むにつれて、演劇や音楽を庶民のものにしようという動きが広まり、さまざまな大衆演劇のスタイルで庶民に広がっていったが、それは1789年に世界ではじめて市民革命をなし遂げたフランスが一番手だったよう……？

そんな、庶民のための大衆演劇の場を提供したのが芝居小屋。この映画は19世紀パリの裏町が舞台。第1部『犯罪大通り』の冒頭に描かれる、「犯罪大通り」の様子は実に興味深い。これはいわば、道頓堀五座と呼ばれる5つの劇場で賑わっていた大阪の道頓堀通りや東京の下町、浅草のような雰囲気、あちこちで大道芸人が芸を披露し、芝居小屋では呼込人が口上を述べている。そして、ここフュナンビュール座の前では、何の役にも立たない芸人だと罵られているバチスト（ジャン＝ルイ・バロー）を横にして、その父親が調子のよい口上で観客を呼び込んでいた。パリのタンブル通りには芝居小屋が立ち並び、波瀾万丈の大衆劇が大流行したらしいが、この通りが犯罪大通りと呼ばれたのは、そこで上演される芝居内容が怪しげだったから……？

## 天井桟敷とは……？

ヨーロッパの劇場はたくさんのバルコニー席があるのが特徴で、この個室(?)から優雅に演劇やオペラ、コンサートを鑑賞しているリッチな人々の姿がよく映画に登場する。大阪の松竹座やシンフォニーホールにはそれに近いものがあるが、日本では完全個室のようなレイアウトはあまりなし……？

他方、天井桟敷とは日本ではあまり聞き慣れない言葉だが、これは芝居小屋の客席後方の最上階、つまり天井との境目に設けられた席。舞台から1番遠く、1番上方から見下ろすことになるから、当然1番安い席というわけだ。

一流劇場にも天井桟敷があるのかどうか知らないが、犯罪大通りにあるフュナ

ンビュール座の天井桟敷は、座席もなく立ち見客ばかり。おまけに、手すりに足をかけて座っている奴もいるほど……。こんな席でも安ければ観客が集まるから、うまく需要と供給のバランスがとれているわけで、彼らのヤジや応援は演ずる役者にとっても大いに刺激的なもの。この雰囲気は、いわば叶麗子を世に送り出した大阪通天閣の歌謡劇場のようなもの。つまり、天井桟敷の観客たちの反応は、芝居が真に観客に受けているかどうかを計る、最も正確なバロメーター……？

## 個性的で魅力的な登場人物たち その1

この映画は、女芸人ガランスと彼女をめぐる4人の男たちの恋をストーリーの骨格として、人生を描いたもの。映画の冒頭、多くの人々が行き交い、大道芸人たちが賑わっている犯罪大通りの様子が映し出されるが、そこを歩いているガランスに声をかけてきたのが、よくしゃべる役者志望の男フレデリック（ピエール・ブラッスール）。フレデリックはフュナンビュール座へ就職活動(?)に赴くべく通りを歩いていたのだが、途中美人を見れば声をかけずにいられないのが、彼の性分……。いるいる、こんな男、特にイタリアやフランスには……？

演劇、特にシェイクスピア劇に自信満々のフレデリックは、座長の娘ナタリー（マリア・カザレス）の取り次ぎによって座長と面会できたが、ケンもほろろの対応にガックリ。ところが、舞台上でとんだハプニングが発生したため、彼は代用役者としてうまく舞台に立つことに成功し、そのままフュナンビュール座に入ることができたからラッキー……。しかし、このフュナンビュール座は「無言劇」が売りだから、いくら役に恵まれてもフレデリックの不満は募るばかり。その挙げ句、彼は……？

## 個性的で魅力的な登場人物たち その2

フレデリックからのナンパ(?)を振り切ったガランスが向かったのは、代書屋の看板を掲げているラスネール（マルセル・エラン）の店。もっとも、代書屋は世を忍ぶ仮の姿で、彼は盗み・恐喝その他何でもありの「裏社会」に生きる無頼派の男。しかし、同時に自分の能力に絶対的な自信をもった反権力志向の一匹狼で、自称劇作家。

そんなラスネールの元をガランスが訪れたのは、ガランスはラスネールとなら色恋抜きで知的な会話を楽しめるため……？ そんな無頼派劇作家のラスネールは、ガランスに対して通常の男のような恋心は抱いていないものの、屈折した想いはやはり同じ……？ したがって、個性的な登場人物たちの中でただ1人のワルであるラスネールが果たす役割は大きいうえ、彼の人生は波瀾万丈……？

### 個性的で魅力的な登場人物たち その3

この映画の主演となる男は、フュナンビュール座の前で口上を述べる父親からボロクソに酷評されていた息子のバチスト。バチストがそのパントマイムの才能を発揮するシーンは、犯罪大通りの雑踏の中で口上を聞いていたガランスが、隣の男から時計を盗まれたとあらぬ疑いをかけられた時。駆けつけてきた警察官が男のアピールを聞いている時、やおら「僕は見ていた」と立ち上がったバチストは、その場で何と自分の目撃した情報を証言するのではなく、見事なパントマイム劇で表現した。これには、観客たちは拍手喝采するとともに、盗まれた男も渋々納得……。ちなみに、実はその犯人は服装こそ立派な紳士だが、スリは手馴れた、無頼派のラスネール……？

「一目会ったその日から恋の花咲くこともある……」という有名なセリフがあったが、この出会いにおけるバチストとガランスがまさにそれ。身寄りもなく、職も家もないにもかかわらず、いつも笑顔で楽しく生きている魅力的な女性ガランスと、やっとパントマイムの仕事に生き甲斐を見出したバチストとの間には、淡い恋が生まれ、急な雨に襲われたある日、遂に2人は……？ 安宿の中に入った2人が醸し出す微妙な雰囲気と濡れた服を脱ぎ、カーテンを身にまとったガランスが「恋なんて簡単よ」と誘うセリフは実におしゃれで、ナチスドイツ占領下のフランスでよくまあこんな映画をつくれたものと感心……。

### 個性的で魅力的な登場人物たち その4

バチストの紹介によってフュナンビュール座に入ったガランスは、その美しさでたちまち人気を集めることに。上流階級の人の中には、同じ階級の中にゴマンという美女たちとは異質の庶民的な女性に興味を示すという変わった男が時々い

るもの……？ フェナンビュール座ではじめてガランスを見たことによって、「今までの自分は死んだ。そして新しい自分が生まれた」と大層なセリフで懸命にガランスを口説くモントレイ伯爵（ルイ・サルー）がそれ。

おおむね、日本人は女性に対する愛の告白や誉め言葉が苦手だが、その点フランス男は達者。そして、ラスネールは変化球が持ち味でかなりのクセ球だが、フレデリックはもちろん、バチストもモントレイ伯爵も女性の口説き方は直球型……？ もっとも、自分の権力や財力を前提として「私はあなたに何でも与えることができる」という口説き方はガランスには逆効果だったようで、ガランスはモントレイ伯爵からの求愛をピシャリとはねつけてしまったが……。

## 個性的で魅力的な登場人物たち その5

バチストを心から愛していると同時に、バチストは自分を愛し、結婚してくれると信じているのが、座長の娘ナタリーだったが、ガランスの登場によってその未来に少し暗雲が……？ バチスト、フレデリック、モントレイ伯爵、ラスネールという4人の男たちも個性的で頑固だが、やはりそれがフランス人の特徴……？ すると、女性も同じだと見えて、ガランスはもちろんこのナタリーも個性的で頑固だから面白い……。

日本人のように、いわゆる腹芸をしたり、「言わなくてもわかるだろう……」ではなく、フランス人は自分の気持ちを1つ1つ言葉にしていけるから、登場人物たちの個性は観客にも実にわかりやすい。そのうえ、195分という長丁場のこの映画には、シャンソンの『枯葉』で知られる詩人で脚本家のジャック・プレヴェールが書いた「恋なんて簡単よ」をはじめとするおしゃれなセリフが満載。

第2部『白い男』では、ナタリーは自分の確信どおりバチストと結婚し、かわいい男の子まで生まれている幸せそうな女性として登場する。そして、今やパントマイムの大スターとなったバチストと共に、彼女も舞台上で共演しているが、そんな幸せな生活が波乱なく続くのは、さて、いつまで……？

## おしゃれなフィナーレから何を学ぶ……？

第2部『白い男』は、第1部から5年後の物語。今やパントマイム劇のバチス

トとセリフ劇のフレデリックは、パリの劇場を代表する大役者になっていた。さらに、第1部のラストで、ラスネールが引き起こしたある犯罪に巻き込まれたガランスは、やむなくモンレー伯爵の名刺(?)を見せることによって難を逃れたが、今やそのガランスはモンレー伯爵のオンナに……? したがって、これらの登場人物たちがそれぞれ自分の人生を歩んでいけば問題は起こらないのだが、そうはいかないのが人生……?

今や少なくとも外見上はすっかり上流階級の貴婦人となったガランスが、顔を隠して秘かにバチストの劇場に通っていたのはなぜ……? そんな彼女を発見したフレデリックがとった行動は……? さらに、モンレー伯爵と大ゲンカをしたラスネールがとった行動は……?

そんな複雑な人間模様を描きながら展開される第2部のフィナーレは、何ともおしゃれなパリのまちに群衆が溢れかえったカーニバルのシーン。帰りの馬車の中に座るガランスを追いかけるバチストだが、この映画に登場した人たちのたぐさんの営みと、このカーニバルの雑踏との対比は実にお見事……。さてあなたは、こんなラストシーンからどんな人生を学ぶのだろうか……?

## フランス映画第1位!

この映画が日本で公開されたのは、やっと戦後復興が終わろうとしている1952年。私が3歳の時だ。この年のキネ旬外国映画第3位となったうえ、1980年のキネ旬報日本公開外国映画史上ベストワンとされたのが、この『天井桟敷の人々』。また、1979年にはフランス映画史上ベストワンに選ばれているとのこと。さらに、私の愛読書である『週刊20世紀シネマ館 No.2』には、「半世紀近くを経た90年。この作品は、フランスのテレビ局主催の投票でフランス映画の第1位に輝き、ル・モンド紙は『しわ1つない若々しい映画』と評した。まさにフランス映画の金字塔である」と書かれている。

やはり、ナチスドイツの占領下においてこんなすばらしい映画がフランス人スタッフによってつくられていたことを、フランス国民はずっと誇りに思っているのだろう。そんな名作を半世紀ぶりに上映してくれたOS名画座に感謝!

2007(平成19)年4月12日記